

学校コンサルテーションの実際

－特別支援学校と小学校との協働による教材作りから－

奈良県立西和養護学校 教諭 丸田 浩美
Maruta Hiromi

要 旨

特別支援学校は、各校の専門性を生かして教育相談を実施しているが、相談件数が年々増加の傾向にある。その中でも、小学校から教科学習における支援方法についての相談が増えている。そこで今年度、特別支援学校と小学校とが「どの子ども分かる授業」を目指して教材製作を行った。その結果から、子どものつまずきを分析し、適切な支援を見つけ出すためには、互いの専門性を生かした協働での取組が重要であるということが見えてきた。

キーワード： センターの機能、協働、個に合わせた指導、どの子ども分かる授業

1 はじめに

平成14年の文部科学省の「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査」で、知的発達に遅れはないものの、学習面や行動面で著しい困難をもっていると担当教員が回答した児童生徒の割合は6.3%であると発表された。平成19年4月に開校した本校も、開校と同時に特別支援教育のセンター的機能を担う機関の一つとして、コミュニケーションの問題や衝動性、多動性などの行動の問題、そして学習面の問題の相談を受けるようになった。

本研究では、小学校の教科の指導に、特別支援学校が今まで実践し蓄積してきた、個々の子どもに合わせた支援という視点で製作した教材を取り入れて、「どの子ども分かる授業」を実践するに至った過程を考察する。

2 研究目的

一斉授業の中では、話を聞き取ることができない、黒板の文字をノートに写すことができない、図工の作品を完成できない、漢字や九九が覚えられないなど、日々の授業の中で困難さを抱えている子どもがいる。そして、それに気づきどう指導すればいいのか分からず悩んでいる教員がいる。実際に受けた相談内容からも、困っている子どもを目の前にして、何とかしてあげたいと一人で問題を抱え込み、一人で教材製作に追われている教員がいることが分かった。

どうすれば子どもの困難さや教員の悩みが軽減されるのか、特別支援学校としてできることは何かを考え、小学校と特別支援学校が協力して、子どものつまずきから個に合った支援を見つけ出し、「どの子ども分かる授業」を目指した教材製作に取り組んだ。

3 研究方法

小学校と協働で算数でつまずきやすい単元とその例を考察し、その後支援方法の検討と教材の製作を行ったり、合同の研修会を行ったりすることで、より効果的な学校コンサルテーションの在り方を研究する。

4 研究内容

(1) 算数の単元でつまずきやすい単元とその例の考察

表1 つまずきやすい単元とつまずきの例①

学年	つまずきやすい単元	つまずきの例
1年生	「100までのかず」	<ul style="list-style-type: none"> ・数直線上に連続して数が存在していることが理解できない。 ・教科書の数直線が理解できない。
2年生	「10000までの数」	<ul style="list-style-type: none"> ・10000より1小さい(大きい)数や、9000より1大きい(小さい)数が分からない。 ・30cmの竹のものさしの目盛りが読めない。

表2 つまずきやすい単元とつまずきの例②

学年	つまずきやすい単元	つまずきの例
3年生	「大きな数」	<ul style="list-style-type: none"> ・位取りを読むときに、空位が入ってくると位がずれる。 ・漢字の百万と1000000が一致していない。 ・10倍や10分の1にすることを概念が難しい。
4年生	「わり算(2)」 2けたで割るわり算	<ul style="list-style-type: none"> ・2けたで割るわり算で商を立てるとき、商がどの位に立つか、どのくらいの商が立つか見当が付かない。 ・九九を覚えきれていない。 ・必要のない数字が目に入るとわり算の筆算ができない。 ・頭の中で数を操作することが難しい。

表3 つまずきやすい単元とつまずきの例③

学年	つまずきやすい単元	つまずきの例
5年生	「割合」	<ul style="list-style-type: none"> ・文章題の中の「もとにする量」「くらべる量」を読みとれない。 ・公式が覚えられない。

(2) 支援方法の検討と教材の製作

ア つまずきの例①の支援と教材の製作

- ・黒板で説明をする際、5とびや10とびの位置が分かりやすいように、赤い直線を付けた数字を数直線上に貼れるようにする。(写真1)

- ・数直線上には、連続して数が存在しているということを視覚的に理解させるため、1～100までの数字を表記したものを示せる。(写真2)
- ・数直線の細かい線を見ることに困難を感じている子どものために、市販されている商品にヒントを得て、手元用の数直線は線の長さを工夫したものや、黒字に白い線などの色を工夫したものなどを製作する。(写真3)



写真1 黒板用の数直線



写真2 表記した数字



写真3 手元用の数直線

イ つまずきの例②の支援と教材の製作

- ・黒板に提示する位取り表の縮小版と、黒板提示用に8桁の枠を作り空位を分かりやすくする。(写真4)
- ・筆算の手順を①(商を)立てる、②かける、③引く、④おろすと視覚的に明確にする。
- ・九九を覚えきれていない子どもには九九の表を持たせる。
- ・筆算の際、必要のない数字をかくすための教材を作製する。1cm方眼マスに合わせられ、商を立てる位置に印を付けたものにする。(写真5・6)



写真4 位取り表



写真5 商立てるくん①



写真6 商立てるくん②

ウ つまずきの例③の支援と教材の製作

- ・何%はこのくらいというイメージをもちやすくするため、実際に操作できる円グラフを作る。円グラフは色を工夫して、社会科でも使用可能なものにする。(写真7)
- ・授業で使用するプリントを作成する。教科書の数字を簡単な数字になおしたり、視覚的支援として図を加えたり、文章題を整理して考えやすい問いを設定したりする。



写真7 円グラフ

(2) コンサルテーションにおける研修の効果

今回のコンサルテーションを行うにあたって、教員の共通理解と専門性の向上のため研修会を実施した。

表4 国立特別支援教育総合研究所による研修

日時・場所	対 象	内 容
平成20年 8月21日(木) 午前 於：上牧町立上牧第三小学校	上牧町立上牧第三小学校教員 県立西和養護学校教育支援部	「チーム・アプローチの重要性と 関係性という視点について」
平成20年 8月21日(木) 午後 於：県立西和養護学校	県立西和養護学校教職員	

上牧町立上牧第三小学校教員と本校教育支援部は、校種の異なる学校の協働について、チームで取り組むことの重要性やそのよさを発揮させるための方策を学んだ。

本校教員は特別支援学校の専門性を生かすために、発達障害の子どもが引き起こす二次的な障害に対して愛着行動に着目しての分析などの講義を受けた。

表5 奈良県立教育研究所特別支援教育部による研修

日時・場所	対 象	内 容
平成20年 7月23日(水)午後 於：県立西和養護学校	県立西和養護学校教育支援部	「アセスメントと心理検査」
平成20年 8月5日(火)午後 於：上牧町立上牧第三小学校	上牧町立上牧第三小学校教員 県立西和養護学校教育支援部	「学校コンサルテーションの実際」 ～互いの専門性を生かすケース会議 の在り方～
平成20年 9月1日(月)午後 於：県立西和養護学校	県立西和養護学校教育支援部	「心理検査を生かした指導」
平成20年 10月29日(水)午後 於：県立西和養護学校	県立西和養護学校教育支援部	「動機付け評定尺度(MAS)を活用した教育相談」

今年度の本校教育支援部の研究テーマは、「検査結果の解釈」である。実際のアセスメントの中で生かすという目標をもって様々な角度から研修を受けた。部員全員が同じ研修を受けることによって、一人一人の専門性が向上するだけでなく、本校としての共通理解を得ることができ今後の教育相談に生かせるものになったと感じている。

5 研究結果と考察

(1) 気づきを促す

コンサルテーションとは、「異なる専門性をもつ複数の者が、援助対象である問題状況について検討し、よりよい援助の在り方について話し合うプロセス」のことである。学校コン

サルテーションの内容としては、「①知識の提供、②精神的な支え、③新しい視点の提示、④ネットワーキングの促進」（国立特別支援教育研究所、2007）などがあげられる。今回の研究も、この四つの視点から進めている。

私たちは、授業内容を理解できない子どもがいてスムーズに授業が進まなかった際、「教え方がよくなかったのか。」と自分を責めたり、「こんなに説明しているのにどうして理解できないのか。」と子どもに責任を転嫁してしまったりしがちである。しかし、黒板の文字をノートに写すことが苦手な子どもがいるときには、「視力や視野に問題はないか。」「文字の大きさは適当だろうか。」「黒板とノートを往復する目の運動に不器用さはないか。」「黒板の文字を覚えてノートに写すまでの記憶力はどうか。」などという視点を子どもにあてると、その子どもにとっての必要な支援が見えてくる。

今回の1年生の教材製作では、どの子ども見やすい数直線を作ろうと、子どもの見え方の困難さをいろいろと考えた。

数直線上に線がたくさん引かれていることで、どの線を見ればいいのか分からなくなっているとき、見やすい数直線の提示を目的として市販のものさしも参考にし、目盛りの並びを変形したり、目盛りがよりはっきり見えるように黒地のものを製作したりした。その過程で、小学校の教員の一人が、「あ、私もこの数直線の方が見やすい！」と声を上げた。その声をきっかけに、「私は教科書の数直線」「私は黒地」等と言いつつ声が聞こえ、人はそれぞれ見やすさがあるということに居合わせた皆が気付くことができた。この気付きをもたらす過程こそが、特別支援学校がもつ知識や視点を取り入れた結果ではないかと考えられる。

(2) 特別支援教育に必要な観点

今回の取組を通して、新たに特別支援教育に必要な観点が見えてきた。一つめは、「個に合わせた指導」である。小学校では中学年のわり算での支援教材を用いた授業を10月に4年生で実践された。どのような教材かを皆に知らせる意味で全員が使用したカラフルな小さい教材を「商立てるくん」と呼んでわり算に活用している子どもたちの姿はとても意欲的であった。しかし、よく見ると教材を使わずスラスラと答えを導き出している子どもがたくさんいた。反対に、かけ算が苦手なため、ノートの上に置いていても、答えを導き出せていない子どももいた。つまり、支援のための教材は、その支援が必要な子どもが使ってこそ効果が出る。また、その教材を使用しても分かりづらい子どもには、他の支援方法を用意するべきである。子どもによって必要な支援方法がちがうことに教員も子どもたちも気付き、いろいろな支援の存在を受け入れていかなければならない。

そのためには、日ごろから子どもたちが「自分に必要な支援」を受けることに違和感を感じない学級運営が大切ではないだろうか。「あの教材があつたら、もっと分かりやすいのにな」と感じた子どもが、必要な教材を手元に置いたり、教員に頼んだりして使用できる雰囲気、日ごろから作っておかなければならない。反対に、先に進みたいと感じている子どもには、発展的なプリント類を用意するのも個に合わせた支援である。しかし、このような幅広い支援教材を教員が個人単位で対応していくことは不可能である。

そこで、二つめの観点が「協働での教材製作」である。校内委員会が中心となり、複数で支援を検討し、学校全体で教材作りを行うことが必要である。

三つめの観点は、「教材の蓄積」である。協働で製作した教材はその学校の財産となり、その単元を学習する際、どの教員も毎年新しく教材を作らなくても使用することができる。

これは、教員の悩みの軽減に大きくかかわってくるのではないか。また、その教材は、使用した教員によって改良を加えられ、よりよい教材へと発展していくという利点も兼ね備えている。

特別支援学校がつまずきにかんする知識や新しい視点を持ち、小学校と共に支援について検討することによって、互いの専門性が融合され、よりよい支援が生まれる。小学校の専門性だけ、あるいは特別支援学校の専門性だけからでは生まれない支援である。その協働の作業から生まれた授業こそが「どの子ども分かる授業」ではないかと考えている。

6 今後の課題

今回の協働での教材製作は、小学校における「個々の子どもの必要な支援は何か」を考えるきっかけ作りだと考えている。小学校では、校内委員会などで子どものつまずきの原因を明らかにし、特別支援教育の視点を取り入れた教材を製作し、今後も「どの子ども分かる授業」への取組を継続していただきたい。本校もセンター的機能を担う機関の一つとして、支援を必要としている子どもたちの検討を行う際、今回の取組を参考にして特別支援学校としてできることは何かと自問し、協働で取り組む姿勢をもち続けたい。

また今回、校種が異なる教員が、同じ目的で話し合い教材作りを進めていくプロセスを共有することができた。共有する難しさを感じながらも互いを理解し協力し合えたことは、学校間のネットワーキングの促進につながる第一歩であり、今後このような取組が多方面でも広がり、子どもたちの「分かった」という声がたくさん聞こえてくることを願っている。(写真8・9・10)



写真8 低学年の試作風景



写真9 中学年の検討会



写真10 高学年の教材作り

引用・参考文献

- (1) 国立特別支援教育総合研究所 (2007) 『学校コンサルテーションを進めるためのガイドブックーコンサルタント必須ー』 ジアース教育新社 pp. 18-19.
- (2) 国立特別支援教育総合研究所 (2007) 『学校コンサルテーションケースブックー実践例から学ぶー』 ジアース教育新社